中部地方の旧石器文化の変遷

—— 野尻湖遺跡群を中心として ——¹⁾

中 村 由 克²⁾

Changes in Palaeolithic Culture of Central Japan, with particular reference to the Nojiri-ko Site Group.¹⁾

Yoshikatsu NAKAMURA²⁾

In Central Japan, many archaeological excavation sites are located around the plains of Toyama, along the middle courses of the Shinano River, at the foot of Mt. Yatsugatake and around Lake Suwa, at the foot of Mt. Ontake, along the Tenryu basin, at the foot of Mt. Atago, and on the Iwatahara tableland.

At the Tategahana site and the Nakamachi site by Lake Nojiri, many cultural layers are found, from the Lower Nojiri-ko Member III (about 40,000 y.B.P.) to the Kashiwabara black ash (Holocene, about 2,000 y.B.P.). Therefore these are the most important sites for the Palaeolithic chronology in the middle courses of the Shinano River.

The Sugikubo A site is a type site for the Sugikubo Culture that occupied North East Japan. The culture layer of the Sugikubo A site corresponds to the Upper Nojiri-ko Member III (about 15,000 y.B.P.).

The Black Band of Upper Nojiri Loam Member I is the oldest culture layer except for the Tategahana site; its Carbon-14 age is about 20,000 years.

Palaeolithic chronology in the Nojiri-ko site group and the middle reaches of the Shinano River is divided as follows.

Phase I: "Nojiri-ko Culture". Nojiri-ko Tategahana site. From Lower Nojiri-ko Member III to Upper Nojiri-ko Member I, about 40,000—24,000 y.B.P.

Phase II: "Backed-blade Culture".

(Phase IIa) Seimeidai site and Shogetsudai site. Black Band of Upper Nojiri Loam Member and lower part of Yellowish Brown Loam.

(Phase IIb) Nakamachi site and others. Upper part of Yellowish Brown Loam.

Phase III: "Micro-blade Culture". Nakamachi site and Mukoushinden site. "Kimoya", uppermost part of Upper Nojiri Loam Member II

Phase IV: "Incipient Jomon Culture". Nakamachi site and Kitsunekubo site. Upper part of "Kimoya" and "Kuromoya", uppermost part of Upper Nojiri Loam Member II

According to this chronology, palaeolithic cultures of Toyama Prefecture and the southern part of Nagano Prefecture correspond to Phase IIa and later, and that of Niigata Prefecture corresponds to Phase IIb and later. The stratigraphy of Tategahana and Nakamachi sites is very important for the palaeolithic chronology of Central Japan.

Considering the correspondence of culture layers, "Nuka-I" tuff near Lake Nojiri corresponds to "AT" tuff of Toyama Prefecture, and not to "AT" tuff of the South Kanto district.

In Central Japan, there is clear evidence that man has been dwelling by Lake Nojiri since about 40,000 years ago and in Toyama Prefecture and the southern part of Nagano Prefecture since about 20,000 years ago.

1) 1987 年 1 月 31 日受付. 1985 年 9 月 1 日 日本第四紀学会シンポジウムで発表.

2) 野尻湖博物館
Nojiri-ko Museum

1. はじめに

近年の旧石器時代にかかわる考古学の発展にはめざましいものがある。特に、武蔵野台地や相模野台地などの南関東地方を中心とする立川ローム層の全層準にわたる大規模発掘調査や、町田・新井(1976, 1983)による始良 Tn 火山灰の発見とその考古学編年への応用は、南関東地方における著しい量の資料により旧石器時代の編年

を容易にしたのである (ODA・KEALLY, 1975)。

このような動向の中で、杉久保、神山、荒屋、矢出川、休場、茶臼山遺跡等(中村, 1965; 藤森, 1965), 先史学史上においてわが国の旧石器(先土器)文化を代表する諸遺跡が発見されている中部日本では、旧石器時代の石器群が層位的に累重した形で検出された例に乏しい。出土層位をもとに地域的な石器群の編年が組み立てられている地域は、富山県、長野県北部の野尻湖周辺、

図1 野尻湖周辺の旧石器時代の遺跡分布
(野尻湖発掘調査団編, 1984)

図 2 野尻湖立が鼻遺跡の出土遺物 (野尻湖人類考古グループ, 1980, 野尻湖発掘調査図編, 1984 より編集)

そして静岡県東部の愛鷹山麓周辺の3地域である。

本論は、野尻湖周辺の資料を中心に富山県と南関東地方の編年との比較を行いながら、中部日本の旧石器文化の変遷を検討することを目的としている。愛鷹山麓は多くの石器群の変遷をつかめる重要な地域であるが、これとの関連についての検討は今のところ不十分なため、ここでは行わない。また、実際に日本海側と静岡県の間位置する長野県中南部の石器群の変遷についても未解決の点が多いので、この検討は別の機会に取り扱うことにしたい。

野尻湖周辺の考古学的研究は、芹沢・麻生(1953)、林ほか(1966)、野尻湖発掘調査団(1975)、森嶋(1975)、野尻湖人類考古グループ(1980)、野尻湖発掘調査団編(1984)、野尻湖発掘調査団人類考古グループほか(1985)などで発表されている。本文はこれらの報告、研究成果にしたがって、他地域との比較検討を加えたものである。なお、杉久保遺跡の層位については、故郷原保真先生の御指導による筆者の昭和52年度信州大学理学部卒業論文の成果の一部を使用し、また、野尻湖地質グループによる調査資料(野尻湖発掘調査団編, 1984)にもとづき、層位の再検討を行なった。

本論のとりまとめにあたっては、野尻湖発掘調査団の方々におうところが多大である。とりわけ、新堀友行、麻生 優、熊井久雄、酒井潤一、赤羽貞幸、小野 昭、実川順一、織笠 昭の諸氏および森嶋 稔氏にはひとかたならぬ御指導と御援助をうけた。また本論の執筆には、近藤洋一、中村敦子の各氏にお世話になった。記して以上の方々に深く感謝の意を表したい。

2. 第Ⅰ期、「野尻湖文化」と同年代相当の石器群

野尻湖周辺では、黒姫山、妙高山を起源とする風化火山灰層(いわゆるローム層)の研究が進み、また、その中から考古遺物が多く得られており、石器群の変遷が詳細にとらえられている(野尻湖発掘調査団編, 1984)。

野尻湖底の立が鼻遺跡では下部野尻湖層Ⅲの下底付近($37, 220 \pm 1, 240 \sim 41, 860 \pm 3, 220$ y. B. P.)から上部野尻湖層Ⅰ($23, 530 \pm 1, 180$ y. B. P.)までの層準から旧石器時代の遺物包含層が検出されている。主要な遺物包含層は下位より下部野尻湖層ⅢBと同層(Ⅳ)、中部野尻湖層Ⅰの上部(“ニセノミ”の直下)、同層のⅡとⅢの境界付近(“赤スコ”の直下)、および土部野尻湖層Ⅰである。遺物包含層からは、*ナウマンゾウ* *Palaeoloxodon nauma-*

nni (MAKIYAMA)、オオツノシカ *Shinomegaceros yabei* SHIKAMA の化石も同時に産出している。人類遺物は中部野尻湖層Ⅱ以下では骨器と小形の剥片石器を主体とする組成であるが、同層Ⅲ以上では縦長剥片を含む中形の剥片石器が主体となる。人為的に打ちわられた獣骨片(スパイラル剥片)は、遺物包含層の全層準から出ている。

立が鼻遺跡の遺物は、一部に縦長剥片を含むものの、全層準をとおして不定形の剥片素材の石器が特徴となっており、しかもこの石器文化は豊富な骨器や骨の剥片を含むという特徴から「野尻湖文化」と提唱されている(野尻湖発掘調査団編, 1984)。野尻湖文化は ^{14}C 年代値から考えると、おおむね後期旧石器時代の前半期のものであり、ODA・KEALLY(1975)による第Ⅰ期に相当するものであろう。ODA・KEALLY(1975)の編年をもとに検討した本地域一帯の旧石器文化から縄文草創期文化までの編年区分を図4に示す(中村, 1986)*1。

中部地方で第Ⅰ期に相当する可能性のある石器群としては、これまで「前期旧石器」といわれていたものが考えられるが、これらの資料については再検討が必要である。「前期旧石器」とされている資料は、長野県の石子原、杉久保 *Apré-I*、愛知県の加生沢、岐阜県の西坂などが報告されている。これらの遺跡からは、どれも大形の礫器とされている資料が出土しているが、それに伴って加生沢(紅村ほか, 1968)、石子原(岡村ほか, 1973)からは小形の剥片石器の一群が報告されている。岡村(1976)はこれらの「前期旧石器」を総括的に検討し、石子原と加生沢第Ⅰ地点の流紋岩製の小形石器を人工品と認め、その年代を北関東の「中部ローム」の下半期から後期旧石器の上半期とした。

石子原の石器群は縦長剥片を含まず、台形状の部厚い剥片を主に素材としており、この点では「野尻湖文化」の前半期にあたる下部野尻湖層Ⅲ～中部野尻湖層Ⅱの石器群と比較できるものである。ただし、石子原の石器群は野尻湖で未確認の石核石器を伴っているという特徴がある。杉久保 *Apré-I* 群(林ほか, 1966)については、後で詳しく述べるが、出土層位が比較的新しいものであり、遺物は一部の剥片石器を別にして、多くは礫片であり「前期旧石器」といえるものではないと考えられる。

このように、中部地方で「前期旧石器」といわれてきた石器群は、人工品でないものは別として、年代的には野尻湖周辺の第Ⅰ期に相当するものが含まれていると思われる。今後、この時期の石器群の比較・検討が望まれ

*1 「日本第四紀学会講演要旨集 15」では、筆者に第Ⅱ期を3区分していたが、その後の検討で変更した。

図 3 野尻湖・信濃川中流域のナイフ形石器文化～縄文草創期文化の遺物

(1・4・7・9・15・16 仲町, 2 中林, 3 壬, 5 荒屋, 6 月岡, 8 上ヶ屋, 10 檜の木平, 11 杉久保A I, 12 貝坂, 13 神山, 14 清明台, 17 伊勢見山 I ; 1～3 第Ⅳ期, 4～6 第Ⅲ期, 7～13 第Ⅱb期, 14～17 第Ⅱa期)

図 4 野尻湖周辺の層位と石器群の編年

るところである。

3. 第 II 期, ナイフ形石器文化

1). 第 II a 期

ナイフ形石器文化の前半期である第 II a 期には、上部野尻ローム層 I の黒色帯、同 II の黄褐色ローム層下部ないし中部が相当し、主要な石器群としては、仲町、伊勢見山 I (以上黒色帯)、清明台、仲町、貫ノ木 (以上褐黄色ローム下部)、照月台 (黄褐色ローム中・下部) などがある。信濃川中流域では、野尻湖周辺以外には第 II a 期の遺跡は知られていない。

仲町遺跡の上部野尻ローム層 I の黒色帯 (20,460±860, 17,800±500 y. B. P.) とその同時異層である上部野尻湖層 I の砂質礫層 (“スナガラ”) からは、多くの石器

が得られている (野尻湖人類考古グループ, 1980; 野尻湖発掘調査団編, 1984)。これらの多くのものは、縦長剥片を素材とする石器群である。ナイフ形石器は 2 側縁にブランディングするものが多く、また台形石器や台形状のナイフ形石器が組成として含まれている。この他、角錐状石器も 1 点得られている。これらの素材となっているのは、打面調整があまり施されず、幅広い打面を持つすづまりの縦長剥片が多い。石核には打面転位が多く行われていることが観察される。

縦長剥片を素材とする石器群とは少し異なる接合資料が、仲町黒色帯文化層から出土している。この接合資料は、母岩を分割して石核とする剥離技法であり (野尻湖発掘調査団編, 1984)、その剥片はやや横長の傾向をもつものである。同様な石器群は、伊勢見山 I 群 (小林

達雄, 1982) に知られている。基部両側縁を加工した台形状のナイフ形石器を含むことなど、全体として仲町の黒色帯文化層とかなり類似しており、同一時期のものと考えられる。

仲町黒色帯、伊勢見山Ⅰ石器群は、剥片剥離技術からみると、武蔵野台地の新橋遺跡第Ⅳ下文化層や群馬県岩宿遺跡第Ⅱ文化層など南関東の第Ⅱa期の特徴が看取される*2。野尻湖底の立が鼻遺跡を別にすると、黒色帯文化層は野尻湖遺跡群の中で最下位の文化層であり、この位置づけが野尻湖遺跡群全体の編年の位置を左右するといっても過言ではない。なお、野尻湖付近の黒色帯中にはガラス質火山灰の「コヌカ」が検出されている。

また、長野県中南部の池のくろみ遺跡(金井ほか, 1969)では、大きな打面をもつ幅広い縦長剥片を素材とするナイフ形石器の一群があり、これに台形石器が伴っていることから、黒色帯文化層と同時期の可能性がある。

野尻湖西方の清明台遺跡(野尻湖人類考古グループ, 1980)では黄褐色ローム層下部(ヌカーⅠ火山灰の同層準又は直下)から、縦長剥片(石刃)の打面を一部残し、基部の両側縁と先端に調整が加えられたナイフ形石器と石刃の先端部に斜め方向にブランティングを施したナイフ形石器がセットで出土している。これにきわめて近い石器群が富山県第Ⅰ期(橋本, 1975)とされる直坂Ⅰ遺跡から出土している。さらに、長野県東南部の向尾根遺跡(平出ほか, 1980)には、打面を残し基部両側縁をブランティングするナイフ形石器が多く含まれており、清明台のものに近いと考えられる。

野尻湖西南方の照月台遺跡と貫ノ木遺跡(野尻湖発掘調査団, 1975; 織笠ほか, 1986)では、黄褐色ローム中・下部から小形ですづまりの剥片を素材とする石器群が出土している。これは、富山県第Ⅱ期aないしbとされている白岩藪ノ上遺跡のものに近いと考えられる。

第Ⅱa期と考えられる遺跡は、上述のとおり野尻湖周辺と富山県を除けば、発見例はあまり多くないといえる。

2). 第Ⅱb期

ナイフ形石器文化の後半期である第Ⅱb期には上部野尻ローム層Ⅱの黄褐色ローム上部が相当し、主要な石器群としては、仲町 V-36、大久保南、仲町 S-15 などが、杉久保 AⅠ～AⅢ、伊勢見山Ⅱ、弁天島南などの石器群もこの時期に相当すると推定される。

この時期のものには杉久保 AⅠ、AⅡ、大久保南、仲

町 V-36 などの石刃を素材とするグループと、仲町 S-15、杉久保 AⅢ、そして上ヶ屋などの小形のナイフ形石器を含み横長剥片を素材とするグループの、大きく2種類の石器群が知られている。

新潟県津南町の神山、貝坂、堤の上の各石器群は、杉久保 AⅠ群、AⅡ群にかなり類似した杉久保系の石器群である。また、橋の木平の石器群は仲町 V-36 に類似した杉久保系と茂呂系の間中間的な石器群と考えられ、いわゆる「砂川期」(田中, 1984)とされているものである。しかし、杉久保系の石器群といわれる砂川期の石器群との新旧関係を直接的(層位的)に示す資料は未発見である。

万年台B、中尾台遺跡などの富山県第Ⅱ期Cとされる石器群は、仲町遺跡の黄褐色ローム上部の石刃素材の石器群に比較できるものである。また、富山県第Ⅳ期aとされている安山岩を主体とした横長剥片による石器群は、仲町遺跡(S-15)黄褐色ローム上部の石器群にほぼ対応するものである。

長野県中南部のナイフ形石器文化は、前述の池のくろみ、向尾根を除くと、茶臼山をはじめほとんどのものが第Ⅱb期に相当すると考えられる。

3. 第Ⅲ期以降

1). 第Ⅲ期

細石器文化を第Ⅲ期とすれば、上部野尻ローム層Ⅱ最上部の黄モヤの層準で、向新田、仲町の石器群がこれにあたる。信濃川中流域では、新潟県の荒屋、月岡、長野県側の千刈、小野平などの石器群がこの時期のものである。富山県では未確認であり、長野県中南部では矢出川、鷹山、和田峠; 柳又Aなどの多くの遺跡が知られている。

2). 第Ⅳ期

神子柴・長者久保文化に相当する石器群が立が鼻B、小丸山をはじめ栄村の横倉などに出土している。しかし、横倉を除けば、層位、遺物組成など不明の点が多い。また、縄文草創期の隆線文土器を伴う文化が、上部野尻ローム層Ⅱ最上部の黄モヤ上部にあたる仲町 V-19、狐久保、石子屋、田沢、中林などにあり、さらにその後続の爪形文土器の時期の文化が同Ⅱ最上部の黒モヤに包含されている。これら一連の旧石器時代末から縄文草創期にかけての文化が第Ⅳ期に属するものである。

*2 南関東と仲町遺跡の石器群の比較については、織笠昭, 織笠明子両氏の御教示をえた。

図5 杉久保遺跡の地質
(左: 野尻湖地質グループ原図, 中: 野尻湖発掘調査図, 1975 を一部改変)

4. いわゆる「AT」とナイフ形石器文化の対比について

1). 杉久保遺跡の層位と年代の再検討

杉久保 A I 群は、信濃川中流域におけるナイフ形石器文化の一基準とされているものである(中村, 1965)。杉久保 A 遺跡の遺物包含層(図. 5)は、上位より A III 群, A II 群が砂礫層中に、そして A I 群がその下の青灰色粘土層中に位置している(亀井編, 1963)。広く知られている ^{14}C 年代値は A I 群を包含する粘土層の下にある泥炭質シルト層(いわゆる“マツカサ層 I”)のものであり、これまで報告されたものは下記のとおりである(野尻湖地質グループ, 1980)。

杉久保 A 遺跡

15,100 $\pm$ 300 y. B. P. (Gak 813); 1965 年, 木片, -15 cm.

17,700 $\pm$ 500 y. B. P. (Gak 812); 1965 年, 泥炭, -40 cm

杉久保 D 遺跡

18,800 $\pm$ 450 y. B. P. 1964 年, 木片.

杉久保花屋テニスコート

16,760 $\pm$ 490 y. B. P. (Gak 6923) 1976 年, 木片.

18,640 $\pm$ 530 y. B. P. (Gak 6922), 1976 年, 木片.

上述の測定値は誤差も含めると 19,250 年前から 14,800 年前までの範囲内におさまり、かなりの精度で一致しているとみなしてよい。この年代は、層位からみる限り、杉久保 A I 群の出現以前の無遺物層を代表する年代であることはいうまでもない。

杉久保 A 遺跡の約 170 m 北方にある花屋テニスコートでは、地表で観察される 3 m に加えて、ボーリング資料も含めて 9 m におよぶ連続サンプルが得られた(図. 5)。地表より柏原黒色火山灰層(下底より縄文早期の山形押型文土器片が出土)、風成の上部野尻ロー層の一部、青灰色粘土層、材化石を多く含む泥炭質粘土層、砂礫層、泥炭質粘土層、砂礫層、そしてその下位に厚い泥炭層が続いている。この中で青灰色粘土層と泥炭質粘土層は A 遺跡における A I 群文化層とその下の“マツカサ層 I”にセットで連続していることがわかる。この泥炭質粘土層中には、多くの植物化石が含まれ、ヒメマツハダ(*Picea shirasawae* HAYASHI)の球果とトウヒ属(*Picea* sp.), モミ属(*Abies* sp.), シラベ(*Abies veitchii* LINDL)などの葉が同定されている(野尻湖花粉グループほか, 1980)。上述の 2 つの ^{14}C 年代値は、この地層中の木片を測定したものである。

なお、テニスコート最下位の泥炭層の上部出土の木片からは、32,540 年前以前という ^{14}C 年代値が測定されている。A 遺跡のすぐ北側の公衆便所裏の試掘溝では、上部野尻湖層が下部野尻湖層を直接、不整合でおおっている現象が観察されていることから考えて、テニスコートの下位の泥炭層は下部野尻湖層のいずれかの層準に属するものと考えられる。

また、湖底の地質調査で A 遺跡の南西方 100~150 m の地点で火山ガラスを大量に含む“ヌカー-I”が細礫まじりの砂層中に薄層として挟在されているのが発見された^{*3}。この砂層は A 遺跡では、“マツカサ層 I”の下位に位置する灰白色砂礫層に連続すると考えられる。この砂礫層は杉久保 A pre-I 文化の包含層とされたものである(林ほか, 1965)。しかし、この層準は“ヌカー-I”を

図 6 富山・野尻湖・南関東との対比

挾在する上部野尻湖層Ⅱにあたり、同層準の立が鼻遺跡や仲町遺跡では、「前期旧石器」といわれるような原始的な石器群は全く得られていない。このことは A pre-I 文化の認定について、再考をうながす層位学的な資料となる。

いづれにしても、今のところ杉久保系文化の中で最も古く位置づけられている杉久保 A I 群文化層は、「ヌカー-I」よりは明確に上位に位置し、また約 16,000 年前～15,000 年前よりも新しい年代に属するものと結論づけられる。

2. いわゆる「AT」とナイフ形石器文化の対比について

野尻湖遺跡群と富山平野周辺とは 4 層準で石器群の対応関係がみられる。一方、野尻湖と南関東とは 3 層準で石器群の対応関係が認められる。野尻湖をなかだちとする、これら 3 地域の旧石器群の編年的な並行関係を図式化すれば、図 6 のとおりである。

石器群を主眼とすれば、このような対応関係が求められるが、火山灰層の上では大きな問題点が生じてくる。この 3 地域で認められている主要なガラス質火山灰層は、南関東の第Ⅵ層の AT、野尻湖周辺の黒色帯のコスカと黄褐色ローム下部のヌカー-I (中村ほか, 1983)、そして富山平野周辺の AT とされる 4 つの火山灰層である。これら 4 層の火山灰のうち、前述したとおり野尻湖周辺のヌカー-I は早津ほか (1983a, b) によって AT とされたものであり、富山平野周辺の AT と同一層準のものと考えられる。問題は、野尻湖周辺の 2 層の火山灰と関東の AT との関係である。旧石器群をみる限り、

野尻湖と富山における主要なガラス質火山灰層付近の層準に位置する石器群は、南関東の立川ローム層第Ⅳ層下部ないし第Ⅴ層の石器群に相当するものと考えられる。

逆に、南関東の AT と野尻湖・富山のガラス質火山灰がすべて同一層準のものということになれば、これまで述べてきた石器群の対応関係がすべて成り立たなくなるのである。この対比に従うと、清明台、直坂 I やさらに仲町黒色帯は、南関東のⅥ層かそれ以前、すなわち武蔵野台地における第Ⅰc 期ないし第Ⅰb 期という、さらに古い年代のものということになってしまう。この点については、富山県側でも AT と石器群の層位にずれが生じるという問題点が指摘されていることは注目される (西井, 1983)。

上述の資料は、現在のところ AT として認められている中部地方北部の火山灰と南関東地方の火山灰が同一層準ではない可能性を示唆している。遺跡における AT に関連した問題点については、麻生・織笠 (1986) の指摘もされており、慎重な検討が必要と思われる。

5. ま と め

野尻湖遺跡群を中心に中部地方の特に北部の旧石器の変遷を検討してきたが、以下にそのまとめと今後に残された課題を述べる。

1) 野尻湖遺跡群の立が鼻、仲町遺跡を中心に、ナイフ形石器を伴わず、骨器と剥片石器を主体とする第Ⅰ期、ナイフ形石器を主体とする第Ⅱa 期、第Ⅱb 期、細石刃文化の第Ⅲ期、縄文草創期文化の第Ⅳ期という編年がたてられる。

*3 野尻湖地質グループ 1982 年 3 月の地質調査の成果 (一部未公表資料) による。

2) 杉久保A遺跡の文化層は、最下位の AI 群でも約 16,000 ないし 15,000 年前以降の年代に属し、AT に前後するような古い年代(森嶋, 1980; 奥村, 1985)ではない。

3) 仲町遺跡の黒色帯文化層は、南関東の第 IIa 期に相当するものと考えられる。

4) 野尻湖遺跡群と富山平野周辺の遺跡群とは、かなりの層準で並行関係が認められる。

5) 野尻湖を仲介として、富山、野尻湖、南関東の3地域の旧石器の対比が可能となってきた。しかし、AT とされているガラス質火山灰層の層位は、南関東と北陸では少しくいちがいが生じており、広域にわたる石器群と火山灰との関係については、今後詳しい厳密な検討が必要となってきた。

引用文献

- 麻生 優・織笠 昭 (1986) 始良 Tn 火山灰層確認前後の旧石器編年; 麻生編「日本考古学における層位論の基礎的研究」, 39 p.
- 藤森栄一 (1965) 中部地方南部の先土器時代; 杉原莊介編「日本の考古学」, I, p. 264—283.
- 橋本 正 (1975) 富山県における先土器時代石器群の概要と問題, 物質文化, 24, p. 15—29.
- 林 茂樹・樋口昇一・森嶋 稔・笹沢 浩・小林 孚・畑田 充・北村直次 (1966) 杉久保A遺跡緊急発掘調査報告, 信濃町教育委員会, 20 p.
- 早津賢二・新井房夫 (1983a) 妙高火山群テフラ地域南部の最新世テフラ層, 示標テフラ層の記載とそれに関係した2, 3の問題, 第四紀研究, 21, p. 1—13.
- 早津賢二・新井房夫・小島正巳・望月 静雄 (1983b) 信濃川流域における先土器時代遺物包含層と示標テフラとの層位関係, 信濃, 35, p. 813—822.
- 平出一治・五味一郎・高見俊樹 (1980) 長野県原村向尾根遺跡緊急発掘調査概報, 長野県考古学会誌, 38, p. 1—16.
- 亀井節夫編 (1963) 湖底を掘る—野尻湖の調査と発掘—, 科学の実験, 14, p. 707—737.
- 金井典美・石井則孝・大脇 潔 (1969) 長野県霧ヶ峯池のくろみ先土器文化遺跡調査報告 (第一次, 第二次), 考古学雑誌, 55, p. 81—99.
- 小林達雄 (1982) 伊勢見山遺跡, 長野県史, 考古資料編・主要遺跡 (北, 東信), p. 56—62.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰発見とその意義—, 科学, 46, p. 339—347.
- 町田 洋・新井房夫 (1983) 広域テフラと考古学, 第四紀研究, 22, p. 133—148.
- 森嶋 稔 (1975) 考古編, 旧石器時代, 上水内郡誌編集委員会編「上水内郡誌歴史編」p. 1—57.
- 森嶋 稔 (1980) 旧石器時代, 千曲川水系古代文化研究所編「編年」p. 3—29.
- 中村孝三郎 (1965) 中部地方北部の先土器時代, 杉原莊介編「日本の考古学」I, p. 242—263.
- 中村由克・野尻湖発掘調査団 (1983) 上部野尻湖層の層序と古環境, 第四紀研究, 22, p. 157—159.
- 中村由克 (1986) 野尻湖・信濃川中流域の旧石器時代遺跡群と石器石材, 信濃, 38, p. 237—252.
- 野尻湖地質グループ (1980) 野尻湖発掘地とその周辺の地質 (1976—1978), 地質学論集, 19, p. 1—31.
- 野尻湖発掘調査団 (1975) 野尻湖の発掘, 1962—1973, 278 p. 共立出版.
- 野尻湖発掘調査団編 (1984) 野尻湖の発掘 3 (1978—1983), 地団研専報, 27, 267 p.
- 野尻湖発掘調査団人類考古グループ・哺乳類グループ (1985) 野尻湖立が鼻遺跡出土の骨製スクレイパーについて, 第四紀研究, 24, p. 111—124.
- 野尻湖人類考古グループ (1980) 野尻湖周辺の人類遺跡, 地質学論集, 19, p. 215—249.
- 野尻湖花粉グループ・野尻湖植物グループ (1980) 野尻湖層の花粉化石と植物遺体, 地質学論集, 19, p. 101—130.
- 西井龍儀 (1983) 富山県の先土器時代研究の現状と諸問題, 石川考古学研究会々誌, 26, p. 23—39.
- ODA, S., KEALLY, C.T. (1975) Japanese Pre-ceramic Cultural chronology, Occasional Papers. no. 2. I.C.U., Archaeology Research Center, Tokyo.
- 岡村道雄 (1976) 日本前期旧石器時代の始源と終末—石器群変遷からの前期旧石器存在の立証—, 考古学研究, 91, p. 73—92.
- 奥村吉信 (1985) 中部地方日本海側の石刃石器群, 旧石器考古学, 31, p. 33—60.
- 織笠 昭・野尻湖発掘調査団 (1986) 長野県野尻湖遺跡群の編年と地域的様相, 日本考古学協会第 52 回総会研究発表要旨, p. 8—9.
- 片沢長介・麻生 優 (1953) 北信・野尻湖発見の無土器文化 (予報), 考古学雑誌, 39, p. 102—109.
- 田中英司 (1984) 砂川型式期石器群の研究, 考古学雑誌, 69, 4. p. 389—421.